



はやぶさ不死身の探査機と宇宙研の物語

吉田 武 著

幻冬舎新書, 295 頁
定価 820 円

読み物
お薦め度
☆☆☆☆★

ホームページには本の雑感を書き散らかしているが、頼まれもしないのに、(アリガタ迷惑な?) 書評を雑誌に投稿するのは十数年ぶりだ。タイトルからわかるように、2005年12月、小惑星イトカワへ到達した探査機はやぶさと宇宙科学研究所(現JAXA宇宙科学研究所本部)の熱い物語である。約300頁で新書としてはかなり分厚く、フォントもところどころ小さくて、著者の思いがギュウギュウに詰まっていることが想像できる。

本書で最初にガツンときたのは目次である。書籍にせよ論文にせよ、書名(タイトル)は本(論文)の顔であり、目次(セクションタイトル)は本(論文)の性格を体現する。だから、書名(見た目)だけでなく目次(性格)は、その本とお付き合いしたいかどうかを決める重要なポイントだ。ところが、書名には派手な化粧をしても、目次は貧相な本が多い。そんな中、

大地の詩/天空の詩/人間の詩

の3部8章で構成された本書の目次は、実によく練られている。プロローグも本におけるツカミのセオリーどおりではあるが上手に書いているし、エピローグもきちんと落としてある。

文章については、いわゆる名文というタイプではないものの、言葉遣い(漢字遣い)は流麗で、こんな言い回しがさらっとできるようになりたい、と思った箇所が何カ所もあった。国語力が第一だと思う人間としては、優れた参考書としてイチオシしたいぐらいだ。加点法の「書籍はやぶさ採点簿」は、表現力&文章力で50点である。

さてメインの内容だが、無理に一言でまとめれば、糸川英夫から始まる日本のロケット開発小史とも言えよう。しかし、糸川英夫の評伝あり(名機

“隼”を設計していたなんて驚き)、宇宙研の発展史あり(知る人ぞ知る宇宙研方式は必読)、宇宙開発事業団との裏話あり(ぼくは楽しんだけど旧NASDA関係者はむかついたかも)、ロケットに関する専門的な話あり(モータとエンジンの違いを初めて知った)、失敗の値打ちや逆転の発想など科学方法論あり(たとえがわかりやすい)、そしてもちろん、はやぶさのドキュメントあり、普通に書けば4,5冊分の内容を凝縮してあるので、消化不良になりそうぐらいだ。加点法では内容までで90点かな。最初は100点満点のつもりだったけど、一晚経って冷静になってみると、ロケットの話は一般にはややマニアックなので(笑)、10点減点し☆も一つ減らした。

最後になったが、投稿属性フラグが立ってしまった理由は、本書の“アツサ”と“ニオイ”だった。頁をめくる指先から、アツサとニオイが伝わってきたのだ。ニオイといっても、香水のような香しい匂いじゃない。汗と酒とおそらく涙の混ざった“クサイ”ほうの臭いだ(太田垣康男『MOONLIGHT MILE』の臭い)。本書を貫いているのは、(いい意味での)大和魂と侠気と言っていだろう。損得抜きで日本独自のものを自分たちの手で創り上げようという心意気である。そしてなにより、著者は科学者と技術者双方の心がとてもよくわかっている人だと思う。科学や技術を推し進める原動力は、書類でもお金でもない。人の心と絆なのだ、とつくづく思った。アツサとニオイは点数化できないので「書籍はやぶさ採点簿」の総合点は不明だが、点なんか、もうどうでもいいから、帰ってこい「はやぶさ」。

福江 純(大阪教育大学)